

(9) 那覇空港周辺地域 まちづくり方針



位置と地勢

本地域は、本市の南西部に位置しており、空港、自衛隊基地、米軍の那覇港湾施設、空港南地区からなる地域です。空港以外の地域は、緩やかな起伏のある地形で、丘陵の自然緑地など豊かな緑が点在しています。滑走路の地先には、貴重な自然海岸である大嶺海岸があり、干潮時には広大な礁池が姿をあらわします。

成り立ち

戦前は、小禄村に属していた鏡水、大嶺、当間、安次嶺、宮城などの集落と農地がひろがっていました。また、ガジャンビラの丘陵を隔てて、旧那覇市に属していた住吉町、垣花町がありました。

住吉町には、琉球王国時代に軍道として整備された真珠道と、その終点である屋良座森城^{ヤラザモリ}が位置し、垣花町には、糸満馬車軌道の始発駅があり、商店が立ち並ぶ活気のあるまちでした。

戦時中には、大嶺、鏡水、安次嶺などが海軍小禄飛行場として接收され、戦後も引き続き米軍の飛行場となり、現在は、空港および自衛隊基地として使用されています。

住吉町と垣花町は、戦後、那覇軍港として土地を接收されました。復帰にともない那覇軍港は那覇港湾施設と名称を換え、返還に向けて跡地利用が検討されています。

那覇空港は、1996（平成8）年の新国内線ターミナル完成、2003（平成15）年の沖縄都市モノレール開業に伴う那覇空港駅開設、2009（平成21）年の貨物ターミナル供用開始、2014（平成26）年の新国際線ターミナル完成などがあり、第2滑走路の建設により、沖縄の空の玄関口として機能強化が進められています。

また、沖縄都市モノレールの開業で、本地域に沖縄都市モノレール株式会社の本社屋、車両基地、ゆいレール展示館などが整備されました。

地域の特 性

① 那覇市および沖縄県の空の玄関口です

本地域にある那覇空港は、国内の主要都市やアジアを中心とした世界各都市を結ぶ路線が就航しており、年間約 2,100 万人以上の乗降客数（2018 年）がある国際空港です。近年は、物流拠点（ANA ハブ）、新国際線ターミナルの供用開始、航空機整備施設の完成など、空港および周辺の機能強化が進められており、2020（令和 2）年には、第 2 滑走路が供用開始しました。本市および沖縄県の空の玄関口として、「ヒト・モノ・コト」が行き交う重要な役割を担っています。



▲ 那覇空港第 2 滑走路
（提供：那覇港湾・空港整備事務所）

② 那覇港湾施設の跡地利用の検討が進められています

那覇港湾施設は、沖縄県の海の玄関口にある那覇港に隣接し、また、那覇空港にも近いことから、都市機能用地として極めて開発効果が高い地域です。また、市域全体が都市化している本市においては非常に貴重なまとまった土地であり、将来の本市・沖縄県の振興に資する跡地利用計画が期待されます。



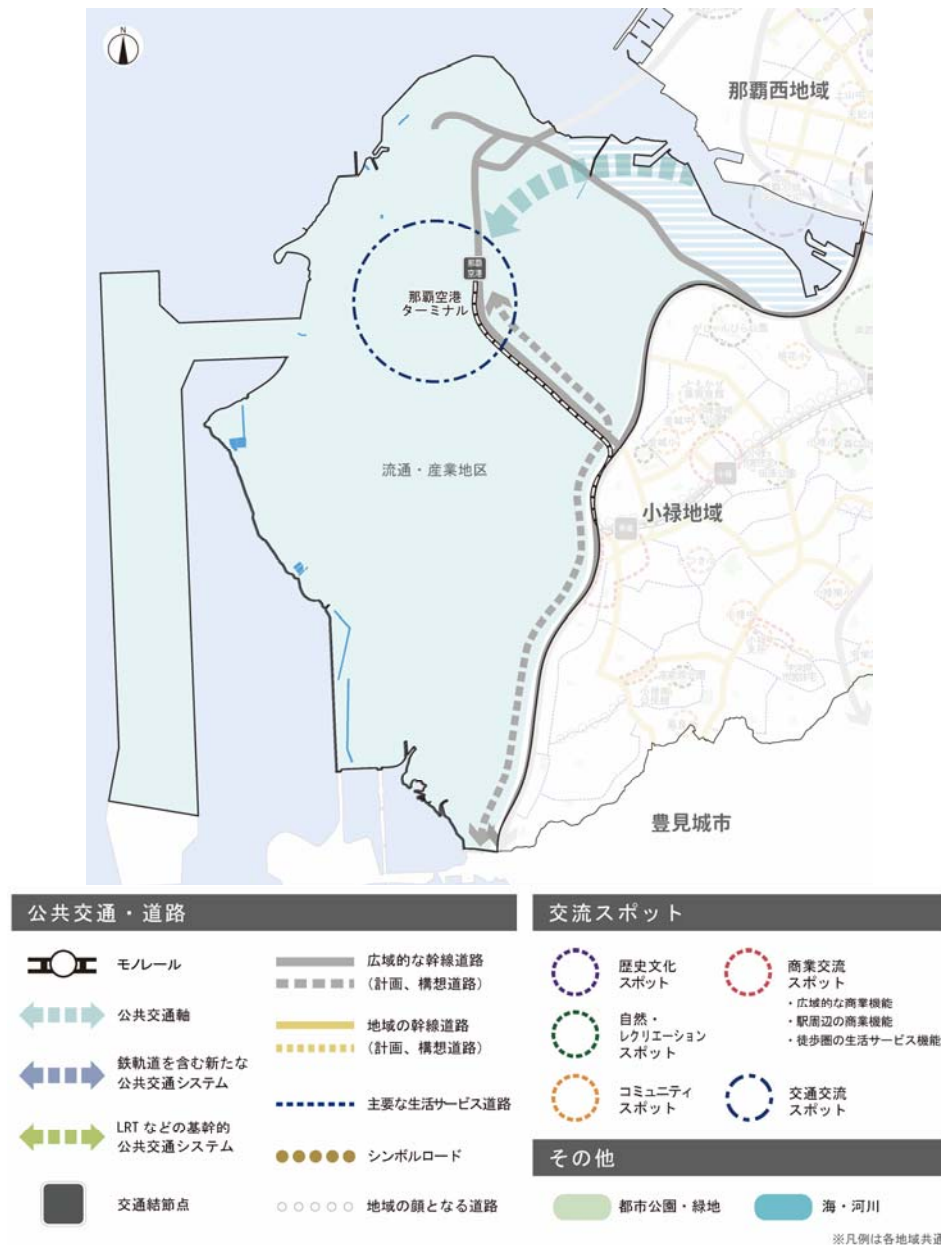
▲ 那覇軍港（2019（平成 31）年撮影）
（提供：那覇港管理組合）

③ 空港南地区の新たなまちづくりが始まっています

高規格道路である小禄道路の整備を契機に、空港南地区のまちづくりの見直しと新たな取り組みが始まっています。2017（平成 29）年には、地区計画の変更が行われ、市民との協働による新たなまちづくりに取り組んでいます。

地域の将来像

空港、港湾地区と隣接する地域の特性を活かし、物流・流通機能の強化や商業・観光・情報機能の集積する地区の形成を促進します。また、本市・沖縄県の空の玄関口として、魅力的なゲート空間の形成や南国を感じる植栽などによる景観形成を進めます。



まちづくり方針

- 亜熱帯都市として、空港から市街地へ向かう空間整備の促進
- 国際的な交流の拠点・物流の拠点として、臨空臨港型の産業の誘導
- 緑の拠点となる樹林・草地などの良好な緑地や海岸線の積極的な保全と空の玄関口にふさわしい景観の形成
- ウォーターフロントの特性を活かした、レクリエーション、国際交流、商業機能、業務機能などの複合的な土地利用の推進
- 事業者の協力による防災機能の向上や安全に避難できる仕組みづくりの促進
- 大規模災害に備え、那覇空港での水・食料・毛布など災害備蓄品の備蓄の促進